

令和三年度 伊達市民憲章 作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「めざしましょう すこやかで活力のあるまちを」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて五百八点の応募がありました。運動に親しむことで感じたことや、活気あふれるまちづくりへの思いなど、自らの体験をもとにしてまっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くのの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

5

【最優秀賞】

ぼくとマラソン

伊達小学校 五年 大山 慶

7

【優秀賞】

緑豊かな町から活力を

掛田小学校 六年 佐藤 優美

8

伊達市民の健幸

保原小学校 六年 田代 結衣

9

【優良賞】

夢の公園に向かって

伊達小学校 六年 秋葉 優真

10

イベントで活力のある町へ

伊達東小学校 五年 小野瑛士朗

11

感謝の気持ちを忘れずに

石田小学校 五年 八島 心優

12

すこやかで活力のある伊達市へ

月舘学園小学校 六年 伊東 琢磨

13

【佳作】

伊達市のために私ができることは

栗野小学校 六年 渡邊 結菜

14

笑顔と元気あふれるまちをめざして

堰本小学校 五年 幕田 幸穂

15

富成をすこやかで活力のある町へ

上保原小学校 五年 佐藤 陽向

16

人も動物もすこやかで活力のあるまちを

掛田小学校 五年 齋藤 心春

17

中学生の部

19

【最優秀賞】

健康で過ごす

月舘学園中学校 二年 佐藤亜矢斗

21

【優秀賞】

輝く伊達市へ。「今」できること

桃陵中学校 二年 武田 杏奈

22

にぎわいのある健幸都市へ

伊達中学校 二年 對馬 佳凜

23

【優良賞】

自分ができることを最大限に

霊山中学校 二年 菅野りり愛

24

活気を取り戻すには

月舘学園中学校 三年 齋藤 理那

25

暮らしと健康

松陽中学校 一年 佐藤 空道

26

未来へのバトン

月舘学園中学校 一年 関根 颯星

27

【佳作】

私の梁川活力化計画

梁川中学校 二年 吉田 奈々美

28

私の住んでいるまち

桃陵中学校 一年 菅野 優花

29

あいさつの重要性

伊達中学校 三年 三浦 莉愛

30

あいさつの役割について考えたこと

梁川中学校 一年 石川 佳依

31

講評

審査委員長 高野 保夫

32

伊達市民憲章

34

小学生の部



最優秀賞

ぼくとマラソン

伊達小学校 五年 大山 慶

ぼくの住んでいる伊達市では、毎年夏に行われている伊達もの里マラソンという大会がある。この大会は、全国から約七千人の方が集まる活気あふれる大会だ。ぼくは、年長の頃から参加している。親子の部門では、父といっしょに走り、入賞したこともある。

そんな中、参加していて気づいたことがある。それは、会場でのボランティアの方々が会を成功させるため一生懸命に力を尽くしてくださっている姿だ。給水を始め、スタートの合図、ゴールテープ、タイム測定、案内など、様々なことにボランティアの方々が関わっている。今思い返せば、感謝の気持ちでいっぱいだ。

また、折り返し地点を越え、つらくなってきた頃に聞こえてくる太鼓の応援は印象的だ。ぼくは毎年その太鼓の勇ましい音に励まされ最後まであきらめずに走りきることができるのだ。おそらくぼくだけでなく、参加者全員ががんばる力をもらっていることだろう。

その他にもこの大会で興味深いのは、色とりどりの仮装である。アニメキャラクターや桃をモチーフにしたかぶり物など、どれもアイディアに富んだものばかりで、見ているだけで思わず笑ってしまうほど楽しめる。

そればかりではない。マラソン大会に参加すると、様々な特典がある。伊達特産の桃やオリジナルグッズのプレゼントなど、全国各地から集まるランナーに伊達のすばらしさをこれでもかとばかりに発信している。伊達の方々の温かさをいろんな所で見ることができる、やさしさあふれる大会なのである。

ぼくは、この大会のファンの一人であり、毎年エントリーするのを楽しみにしていた。しかし、それが叶わなくなってしまった。新型コロナウイルスの影響である。感染拡大防止のため、昨年今年と、二年連続で延期が決まった。今年はその代替として、オンラインマラソンイベントが行われたものの、年齢制限により、ぼくはエントリーすることができなかった。あまりのショックでしばらく声も出なかったほど。母から聞いた話によると、このオンラインイベントは、すぐに定員に達してしまっただけ。つまりこのことは、全国各地にたくさんファンが存在することの証となっている。早く新型コロナウイルスが終息し、この大会が再開し、再び全国からファンが集まってくれることを願いたい。その時、必ずぼくもその中の一人になっていることだろう。今から、その日がくるのがとても待ち遠しい。

ぼくは、この伊達の街並みが大好きだ。限りなく広がる桃畑、ジーと鳴き続けるセミの声、盆地特有の蒸し暑さ。そんな夏が一番大好きだ。このような状況ではあるけれど、ぼくはぼくでこの大好きな街を走り続けたい。「健やかで活力のあるまちづくりを目指して」自分ができることをやっていきたいと思う。

優秀賞

緑豊かな町から活力を

掛田小学校 六年 佐藤 優美

私が住んでいる町には「霊山」という山があります。しかし、私はまだこの山に登ったことがありません。今から十年前に起きた東日本大震災からの原発事故のため、この地域も少なからず影響があったからです。私が物心ついた頃には、外で遊ぶ時間が制限されている状態で、外で走りながら遊んだり運動したりするという感覚がなかったのです。この十年の間に「健幸都市」の実現を目指して学校から市全体でいろいろな取り組みをしてきました。子どもからお年寄りまで市民ひとりひとりが運動に親しみ健康で幸せな生活を取り戻そうとしています。しかし、市民の「運動不足」は根強いもので、これからもこの取り組みを進めていく必要があると思います。

震災前の霊山には、ハイキングコースが整備され、県内外から沢山の人が登山に訪れていたと聞きました。私の父も母も、祖父母も一度は登ったことがある山、掛田小学校も毎年行事の一つに霊山登山をしていたと聞き、私も一度は登ってみたいと思いました。

そこで、霊山について調べてみることにしました。伊達市と相馬市との境にそびえる標高八百二十五メートルの登山しやすい山。国の

名勝、日本百景などに指定されているだけでなく南北朝時代の重要な城跡遺構として国の史跡にも指定されている歴史ある山。こんなに身近なところに、全国にはこれる場所があったなんて、とてもびっくりしました。登る前にこの歴史について調べてから登れば、より一層、登るのが楽しくなるのではないかと思います。

さらに、霊山は四季折々の季節を感じながら年中登ることが出来る山ということも魅力の一つだと思います。私は昨年の秋、紅葉を見ようと霊山の登山口まで行きました。その時の景色は、色づいた木々の黄、赤、緑の三色に、ゴツゴツとした岩肌も所々に合わさり素晴らしい景色でした。帰り道は霊山のふもとを通る林道を通りましたが、そこもずっと絶景。今でも心に残っています。

しかし、この霊山の歴史や素晴らしいさを実際に見て知っている人はどのくらいいるでしょうか。友達の多くは、私と同じく登ったことがないと答えると思います。伊達市内にも、霊山に行ったことのない人がいるでしょう。私は霊山登山を通して運動に親しみ、歴史を学び、自分たちが住む町を知ることが地域も輝く活気ある町づくりを推進する一つの手段になるのではないかと思います。十月末には、霊山地区の小中学生が霊山登山をする行事も計画されており、今から楽しみです。歴史ある山、美しい景色のえられる山が、私たちにとって身近なものになると思います。

震災からの復興、昨年からのコロナ禍と新たな困難の中ですが、地域の宝の霊山を眺め、四季を感じるウォーキングなど、日常的に歩く習慣が広がればいいなと思います。

伊達市民の健幸

保原小学校 六年 田代 結衣

私が住んでいる伊達市は、人口約六万人の自然豊かな所です。農業やニット産業がさかんですが、特に果物生産は、桃やあんぽ柿など全国的にも有名で美味しいと評判です。このように、自然豊かで、美味しい果物に囲まれた伊達市には、生まれたばかりの赤ちゃんからお年寄りまで、様々な年代の人が日々生活しています。多くの人が、健康で楽しく幸せに暮らすために取り組んでいることや、自分がこれからできることは何だろうかと考えました。

伊達市のホームページを見ると、伊達市は「健幸都市宣言」という宣言をして様々な取り組みを行っていることが分かります。「健康であることそのものは、個人としての幸せであるとともに、地域社会全体を明るく暮らしやすくしていくもの」として、市民ひとりひとりが健康で幸せな生活を送るため、「健幸都市」の実現を目指しています。

その中でも、「だてな健幸ポイント事業」というものに興味をもちました。十八才以上の市民を対象に、健康づくりに取り組むことでポイントが貯まり、福島県内の協力店や、福島県、伊達市からのお得な特典を受けることができるというものです。ポイントの貯め方は歩数の計測、イベント参加、バーチャルウォークなど様々な方

法があります。

私の父は、ウォーキングをしています。さっそく、だてな健幸ポイント事業のことを教えて、参加するようにすすめてみました。ただ歩くのではなく、ポイントを貯めるという目標ができることや常に健康を意識して生活することができるので、とても良い取り組みだと思ったからです。父は、私の話を聞いて申し込みをすることにしました。この取り組みが広がり、身近な人が健康になって活力があふれるようになれば、伊達市全体が変わっていくと思います。

小学生の私ができることは、自分が健康で元気に過ごせるように、「早寝早起き朝ごはん」の規則正しい生活を送ることです。

また、健幸ポイントのことを調べていた時に、「だてな健幸体操」という体操があることを知りました。伊達市内で毎日十七時に流れる一分間の伊達市歌に合わせて、伊達市オリジナルの体操を行うというものです。年齢を問わず、だれでも気軽に取り組むことができる体操なので、運動不足の私も取り組んでみようと思います。家族や友達など身近な人にもすすめていきます。

今、コロナウイルスという目には見えないものが私たちの健康をおびやかしています。不安を感じている人もいるでしょう。しかし、市民みんなが健康であることを心がけて生活することで、「すこやかで活力のあるまち」を創り上げていけると思います。

そんな伊達市で、私も健康な体づくりを意識して生活し、健幸に暮らしていきたいです。

優良賞

夢の公園に向かって

伊達小学校 六年 秋葉 優真

ぼくは、泳ぐことが好きだ。今年の夏休みもコロナ禍で旅行などには行けないので、プールに行っていた。プールで泳ぐと、いやなことなど忘れて、気持ちがすっきりする。それに、運動不足解消にもなる。しかし、伊達町には公共のプールがないので遠くまでいかなければならない。だから、伊達町にプールがあると思つた。そして、泳いでいる時のように気持ちがすっきりして、子どもからお年寄りまでが楽しく、安全に過ごせる森の公園があつたらもつとよいと考えた。

その公園には、楽しく安全なアスレチックがあり、すべてのアトラクションは木できていて、木の間を渡るつり橋もある。体力アップすること間違いなしだ。そして、その公園の中には小川が流れていて、メダカなどが泳いでいる。そこは、外来種が入ってこないようにして、在来種の魚の楽園にしたい。その小川には、中がのぞける窓のようなものがあり、メダカ達が泳いでいるのが見えるようになっていて。小さな子供が遊べるせせらぎもあり、小さなたきまである。そのたきの裏はどうくつになっていて、夜になるとホタルが飛ぶ。それらをながめられる休けい所もあるのだ。こんな場所があつたら、みんなの心も

体も元気になるのではないか。しかし、こんなプール付きの公園を作るには、多額の費用が必要で、夢のようなことだと思われるかもしれない。でも、絶対にできないことなのだろうか。

ぼくは、今できることを考えてみた。まず、みんなで川をきれいにすることだ。ホタルは、きれいな川にしかいない。それに、えさとなるカワニナが住めるようにしなければならない。川が生き物が住めるような環境になれば、メダカも増えるだろう。五年生の理科でメダカの学習をするが、店で買ったメダカではなく、伊達町のメダカを観察できるのだ。現在、家の近くに小川や堀のある町内会では、みなでごみやヘドロ取りなどをしている。年に一度でいいから、伊達町のみんなで川をきれいにするイベントを開き、みんなの川だという意識を高めていくのはどうか。それから、伊達町の小さな公園にある遊具を活用することだ。残念ながらあまり活用されていない公園もある。みんなで遊具をもつと明るい色にぬつてはどうか。周りの草取りやごみ拾いもして安心して使えるようにするのだ。側に興味を引きそうな雲などの形をしたベンチを置き、休けいできるようにする。また、公園がどこにあるのかポスターなどで知らせ、気軽に楽しんで使えるようにしてはどうか。

それでも、ぼくの考える公園実現にはほど遠い。しかし、できることから始めなければ、夢には近付けない。いつか実現するかもしれない「森の公園」を想像しながら、みんなで取り組むことは楽しいのではないか。それは、伊達市全体の活力アップにもなると思うのだ。

イベントで活力のある町へ

伊達東小学校 五年 小野 瑛士朗

ぼくは、市民憲章の「すこやかで活力のあるまち」とはどんなまちなのか、考えてみました。サブテーマを見てみると、「健康都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活力あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。」と書いてあります。この文を読んで、ぼくは、子どもからお年寄りまで、みんなが参加できる楽しいイベントがあれば、ぼくの住むこの地域が活力のあるまちになるのではないかと思います。

まず、母に質問をしました。

「今まで、子どもからお年寄りまで参加できる行事って、何かあったかな。」

「そうね、夏は盆踊り。あとは、座禅会や産業祭り、秋の大運動会なんかがあったよ。」

と、地域の大人と子どもが関わる行事がたくさんあったことを教えてくれました。今は子どもの数がどんどんへり、参加する大人もいなくなってしまうことなどが理由で、行事がだんだんとなくなってしまうっていったようです。

けれど、また地域の人たちが関わるきっかけになればと思い、ぼ

くは三つ、イベントを考えてみました。

一つ目は、柿むき大会です。伊達のはちや柿はあんぽ柿の原料で、伊達市民にとって、大切な特産品の一つです。そのはちや柿の皮むきをします。

二つ目は、伊達のししまいの赤ベコバージョン作りです。有名な赤ベコと合わせて、伊達市民に伊達のししまいの良さをアピールします。三つ目は、伊達の名所をめぐる、なぞとき宝探し大会を開くことです。伊達の歴史に関わるなぞをといたり、名所を見て回ったりすることで、伊達を知り、伊達のことを大好きになると思います。

今は、新型コロナウイルスのえいきょうでイベントで人が集まることはできません。しかし、だからこそ、スマホやタブレットで参加するなどの新しい方法で交流ができるようになるかもしれません。そうすれば、地域の人たちだけではなく、遠くて、なかなか伊達に直接来られない人たちにも伊達のことを知ってもらうきっかけになるのではないかなと思いました。

子どもからお年寄りまで、いろいろな世代が交流できる楽しいイベントがあれば、それに向けて、健康に気をつけたり、体力をつけたりします。また、まちにどんな人が住んでいるのか知ることでもきて、安全なまちになります。伊達のことを知らない人たちが、伊達を訪れてみたいという気持ちになるはずです。たくさんのイベントが開かれて、伊達市が「すこやかで活力のあるまち」になるとよいなあと思いました。

感謝の気持ちを忘れずに

石田小学校 五年 八島 心優

私は、石田に住んでいます。石田は自然が多くて、地域には優しい人がたくさんいます。石田では、地域の人やお年寄りと一緒に遊んだり、学習したりすることが多いです。だんごさし、運動会、学習発表会、石田っ子クラブ、石田ボランティアなど、様々なことで交流します。その中でも交流が多くて、楽しい活動を紹介します。

石田っ子クラブでは、一緒に料理を作ったり、昔遊びで、お手玉、かるた、あやとり、紙風船をしたりして遊びます。季節に合わせたイベントもあります。ハロウィンの時には石田地区の家を回ったり、冬にはたこを作ったこあげをしたりします。地域の人やさしく教えてくれるので、とても楽しいです。今は、コロナでやっていけないけれど、コロナが収まったら、また、一緒に遊びたいです。

だんごさしでは、地域の人学校に来て、一緒にだんごを木にさします。なぜだんごさしをやるのかを教えてもらったり、だんごと一緒に作ったりします。

「あんだは、どこの孫だい。」

「学校楽しいかい。」

などと、地域の人と話しかけてくれるので、私も、

「どこにかざればいいですか。」

などと、聞きながらだんごをさします。会話をしながら活動するのが、すごく楽しいです。

石田ボランティアでは、いつもお世話になっている地域の人にダンスをひろうしたり、自分たちで育てた花を配ったりしています。特に、ダンスをひろうしたり、花を手わたしたりしたときの地域の人の笑顔を見ると、私まで笑顔になつてうれしくなります。

石田小学校では、霊山登山もしています。道先案内さんに森のサングと呼ばれる木の名前や、もみじやへびいちごのことを教えてもらいながら山に登ります。上の学年が下の学年のお世話をしながら登るのはたいへんだけど、楽しいです。

地域の人たちと交流することがとても楽しいので、地域の人たちがこれからも元気でいられるように私もがんばりたいと思いました。そのため私にできることは何でしょうか。

地域の人とコミュニケーションをもつとたくさんとることです。あいさつをしたり話しかけたりするなど、もつと話せば気軽に交流できるようになると思います。

そして、いつもお世話になっている地域の人に、もつとたくさん「ありがとう」と伝えることです。ふだんは、あまり言えないけれど、感謝の気持ちを伝えれば、相手も笑顔になつて、自分も元気をもらえます。

石田のみんなが元気に生活するために「交流する・話す・感謝する」ことを忘れないで地域の人ともつともつとかかわりたいです。そしてこれからは、私の住んでいる石田がもっと発展していくように私もがんばります。

すこやかで活力のある伊達市へ

月舘学園小学校 六年 伊東 琢磨

「すこやかで活力のあるまちづくり」について何ができるか考えた際に、四つの案が浮かびましたので述べたいと思います。

一つ目は、高齢化問題についてです。高齢化問題を考えた時、少子化問題と深くつながりがあるのではないかと考えました。なぜなら、少子化が改善されない限り、高齢者を世話する者がどんどん減っていくからです。

そこで少子化問題を解決するために大切なことは、安心して子どもを産める環境をつくっていくことだと思います。共働きが多い中で子どもを預ける場所が足りなくて困っているという話をよく聞きます。そのため子どもを産むのをとまどう夫婦が多く、少子化が加速するという悪じゅんかんが生じています。だから安心して仕事ができ、夜遅くまで子どもを預かってくれる施設を多く設置する必要があります。があると思います。

二つ目は、新型コロナウイルスのせいで、外に出て体を動かす機会が減り、運動不足による体力の低下があらわれています。今後なかなかコロナが収まらない状況が続けば、さらに健康を害する人が増えてくると思います。これに対しては、密閉、密接、密集をさけた遊びや運動ができる環境を整えていく必要があります。

間仕切りをしたり、空気のじゅんかんをしたりして、安心して体

を動かすことができる運動施設をつくってほしいです。

三つ目は、コロナ感染が収まってから取り入れてほしいことです。が、年配の方と一緒に活動する機会を増やすことです。昔の話を聞いたり、遊んだりして交流を重ねることで、年配の方を理解するきっかけにもなります。そして、その経験が将来の介護にも役立つことになると思います。

四つ目は、伊達市の特産物に関わる体験授業を増やすことです。伊達市には、たくさんのお果物や野菜があり、ももやあんぽ柿、きゅうりなどは有名な特産物です。栽培活動や収穫体験を通して郷土の特産物に改めて興味を持ち、将来生産に関わっていききたいと思う若者が出てくるかもしれません。また、収穫した実を持ち帰って、あらたなスイーツを作成することも産業の発展につながると 생각합니다。値段を子どもたちで設定して、自分たちで開発した製品を実際に売ってみるのも、伊達市の一員として活気のある活動ができるのではないかと思います。

大事なことは、伊達市の一人一人が、他人任せではなく、伊達市が活力あるまちになるために、どうすればいいかを本気で考え、言葉に発し、行動に移していくことではないでしょうか。

いつかはマスクを外して、ここに述べてきたことが安心して実行できるように、今何ができるのかを考え、そのための準備を整えていきたいと思っています。

佳作

伊達市のために私ができることは

栗野小学校 六年 渡邊 結菜

私のふるさと、伊達市。豊かな自然があり、心の温かな人々が暮らすこの伊達市が、私は大好きです。今まで以上に活気に満ちあふれた伊達市にするためにどんなことが必要か、自分なりに考えてみました。

一つ目に大切なことが「元気」です。体が健康であること、それだけでなく心の状態も良いことが、重要だと思いました。健康でないとどんなことも楽しむことが出来ないし、努力することもできないからです。

二つ目は「笑顔」です。子どもからお年寄りまで、みんな笑顔になれることが大切だと思います。みんなが笑顔になれるためには、お互いに支え合うことが必要です。困っている時に力を貸したり、それぞれが得意なことを生かして町づくりをしたりすることです。

「元気」と「笑顔」が生まれる取り組みを、私ができることで実践してみました。

一つ目は、ゴミ拾いです。私は外を散歩している時に、空のペットボトルや、お弁当の空き容器などをよく見つけます。そのままにしては町が汚れてしまうので、拾って持ち帰り、ちゃんと分別して捨てていきます。これは、歩きながらゴミを拾い、分別して捨てるという取り組みをテレビで見ながら、自分もそうするようになりました。その方は、

どんなにゴミの量が多くても地域の方と協力し、あきらめずに拾っていて、感動しました。私も自分の住む町のため、今後も頑張りたいです。

二つ目は、あいさつです。地域の方に会ったら、元気よく、出来るだけ笑顔であいさつすることを心がけています。あいさつをするとうれしい気持ちになり、相手から返事が返ってくると、とても嬉しい気持ちになります。少し離れた場所にいても、聞こえるようにあいさつをするよう心がけています。しかし、相手が中学生や小さい子どもだと、あいさつ出来ないことがありました。大人に対してのあいさつと同じように、出来るようにしたいです。

三つ目は、ゆずり合いです。自転車に乗ってせまい道を通っている時、前からも人が来る時があります。そんな時に、私は、「お先にどうぞ。」

と言い、自転車をじゃまにならない所に寄せて、ゆずってあげることを心がけています。

「ありがとう。」

と、お礼を言われると、嬉しくなって思わず笑顔になってしまいます。とがあります。人のために役に立つことは、自分にとっても嬉しいことなんだと、改めて感じています。

このように、自分の考えた実践をすることで、「元気」と「笑顔」を少しは広げることが出来たのではないかと思います。私は毎日、地域の方々と関わりながら生活しています。その関わりの中で自分の出来る取り組みを増やしていけば、活気に満ちあふれた伊達市に近づくのではないかと思います。これからも「元気」と「笑顔」を増やしていきたいです。

笑顔と元気あふれるまちをめざして

堰本小学校 五年 幕田 幸穂

私達の住む堰本地区には、子どもからお年よりまで、様々な人が生活しています。また、私の通う堰本小学校では、休み時間にいろいろな学年の人達が男女関係なくいっしょになって、サッカーや一輪車、竹馬などをして楽しく遊んでいます。毎週火曜日と木曜日には、全校生が目標に向かって朝のマラソンをがんばっています。

地域の人も交流館で体をしたり、田んぼや畑で仕事をしてりしている姿をよく見かけます。そのせいかみんなとても健康的で明るく元気です。

私の家族もたくさん体を動かしています。おじいちゃんとおばあちゃんは、グラウンドゴルフをしています。すごく暑い夏の日も、寒い冬でもグラウンドが使えない日以外は、毎日二人でグラウンドゴルフに出かけています。地域の人達ととても楽しそうに体を動かしています。夏の暑い日は熱中症にならないか少し心配になってしまいましたが、汗をたくさんかいてスッカリしているようです。

他にもおいしいお米や野菜も作ってくれています。おばあちゃんは犬の散歩にも行きます。おじいちゃんとおばあちゃんの二人とも、毎日元気でいてくれるのでとてもうれしいです。

お母さんは、ようち園で働いています。毎日子ども達と走り回っ

て遊んでいるようで、汗だくになって帰って来ます。時々ジムに行くこともあります。家族みんな体を動かすのが大好きです。

私も週に一回ダンス教室へ通い、二時間ヒップホップダンスをおどっています。同じ小学校の友達はいませんが、他の小学校の友達と楽しく練習しています。

仲間と楽しく運動することは、とても良いことだと思います。みんながたくさん体を動かして、たくさんおいしいごはんを食べて、笑って過ごしていけば、健康で元気なまちになるのではないかと思います。

さらに、明るく元気なまちにするために必要なことは「あいさつ」だと思います。あいさつすることを通じて、人と人とのつながりができると思います。堰本小学校では、一年間に数回あいさつ運動を行っています。そのあいさつ運動を通して、「あいさつは自分も相手も元気で笑顔になれる、ま法みたいな言葉」だということが分かりました。そして、あいさつは「いつでも、どこでも、だれにでも」することが大切だということを学びました。先生はもちろん、他のクラスの友達とも元気なあいさつをして仲良くなりたいです。そして、地域の人達への元気な明るいあいさつで、笑顔あふれるまちにしていきたいです。

これからいろいろなことにちょう戦していきたいと思っています。そして、友達や地域の人達と楽しく運動をしたり、元気なあいさつをしたりして、活気のあるいいまちにしたいです。

富成をすこやかで活力のある町へ

上保原小学校 五年 佐藤 陽向

私が住んでいる地域は富沢で、通称富成と呼ばれています。富成は、活力はあるけれど少ない感じがします。それは、人との関わりは深いけれど住んでいる人が少ないからです。

富成はなぜ、人が少ないのでしょうか。人が増えれば、活力のある富成になると思うのに。私は、なぜ人が少ないのかについて、二つ理由を考えました。

一つ目は、近くにお店がなく不便な所です。お店が近くにないと、何か買いたいときに、わざわざ遠くまで行かないといけません。

二つ目は、富成の良い所を他の地域にあまりアピールしていない所です。富成は、自然がいっぱいです。どこを見渡しても山があり、動物、虫たちがたくさんいます。そういう所をみんなが知らないと思います。いろいろな方法でアピールすれば、富成に興味をもつ人が増えて、富成に住む人も増えると思います。

でもあまり人を多くしすぎると、富成の他のよさが失われてしまうかもしれません。それは、人との関わりや自然です。

富成は人との関わりが深く、みんなの仲が良いと思います。私の家はよく、ご近所さんたちから野菜などのおすそ分けをもらいます。いつも玄関前に置いてあるのですが、それは置いてあっても取られる心配がないから

だと思っています。富成に住んでいる人が少ないからこそ、だれがどんな人か知っていて、安心感があるのだと思います。もし富成に住む人が多くなって、人との深い関わりが減ってしまったら、私はすごくいやだなと思います。そしてもう一つ、人が多くなると、ゴミが増えるのではないかと思います。ゴミが増えると、富成の自然が失われ、富成のよさが減ってしまうかもしれません。だから、私はあまり人を多くしすぎない方がいいと思います。富成を活力のある町にするためには、今の良い所を無くさないよう工夫してアピールすればいいと思います。他の地域の人が少しでも富成を気にかけてくれるようアピールすれば、富成にもっと活力が出てくると 생각합니다。

例えば、富成には寺子屋という交流会があります。それは、東京の大学生と富成の子どもたちが交流する会です。私は毎年とても楽しみにしています。交流会の中で、少しでも東京の大学生に富成のことをアピールできたらいいと思います。

こういうイベントに積極的に参加し、森林がきれいだと伝えたり、アピールしたりしたいと思います。日ごろから会話の中で、富成のよさを伝えていくのもよいと思います。

また、富成を便利にするためにちよつとした生活用品の置いてあるお店を建てればいいと思います。そうしたら、人が増えると思います。ゴミが多くなる問題は、ポスターなどを作って注意すればよいと思います。このように、問題の解決方法を考えながら、富成を活力のある町にしていきたいです。

人も動物もすこやかで活力のあるまちを

掛田小学校 五年 齋藤 心春

「すこやかで活力のあるまちを」ってどんなまちだろう。「健康都市宣言をふまえ、地いきも人もかがやくまちづくり」って幸せがあるのは心も幸せな都市っていう意味かもしれない。わたしは、「すこやか」を辞書で調べてみました。すると、①健康で丈夫な様子、②心が正しくて、しっかりしている様子とありました。やっぱり、伊達市は体だけでなく心も元気なまちを目指していることを、改めて感じました。そんなわたしが、「すこやかなまち」を考えたとき、真っ先にうかんだことは、動物を通したまちづくりでした。

わたしの家は、わたしが生まれる前から、犬やねこ、インコなどを飼っています。おさないころから動物たちにかこまれて育ってきわたしたしは、動物が大好きになりました。

動物にはすごい力があります。その力を活用するのが、アニマルセラピーです。動物とのふれあいを通して、動物の持ついやしの力で、人々の心や体を健康にするのです。わたしも、つかれた時やいやなことがあった時、犬のマロンをだっこしたり、おにごっこしたりすると、明日もがんばろうと元気をもらいます。伊達市の人たちにも、動物の力でもっと明るく元気になって欲しいと思いました。

また、伊達市は「歩いてくらすまち」も目指していることを知ります。

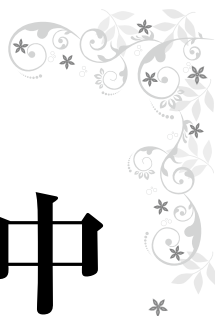
した。そのため、みんなが安心して歩く青い歩道を、霊山のあちこちで見ます。けれども歩いている人はあまりいないようです。犬と一緒に歩くわたしは、楽しくて、一時間も歩いてしまいます。伊達市の人たちも、動物と一緒にいたら、楽しく歩くことができるようになると思いました。そして、動物の力で、人が健康になるのだから、動物たちにとってもうれしい伊達市になって欲しいと、わたしは考えました。それは、森林を生かしドッグランなど動物が遊べる場所を作ることです。理由は三つあります。

一つ目は、伊達市の自然を生かし、ドッグランを作るために切った山の木を、犬が活動する場所のさくや遊具にしたり、飼い主が待つカフェにしたりすることで、木をむだにすることなく、自然にやさしいドッグランが作れると思うからです。

二つ目は、ドッグランに人が集まることで、動物が大好きな人たちのふれあいが生まれ、人と人との関係が深くなると思うからです。三つ目は、SNSなどで、より多くの人に伊達市は動物にも人にも自然にもやさしいまちであることをせん伝すれば、動物や自然を大切にする人が増えると思うからです。

空気がきれいで、いつも鳥の声がする伊達市。ドッグランなど動物が遊べる場所ができれば、さらに人も動物もリラックスして過ごせる伊達市となり、すごく幸せな気分になることでしょう。それは、人と動物の交流だけでなく、人と人との交流を増やし、さらに活力のあるまちづくりにつながると 생각합니다。

中学生の部



最優秀賞

健康で過ごす

月館学園中学校 二年 佐藤亜矢斗

伊達市民憲章作文のテーマ「めざしましょう すこやかで活力のあるまちを」を見たとき、祖母の顔が浮かびました。

僕の祖母は、月館町に一人で暮らしています。学校の帰りに祖母の家に寄ると、近所の人達とウォーキングに出かけて留守のときがありました。祖母はウォーキングで体力づくりをしているのです。コロナ禍になる前は、保原町の市民プールへも行っていました。運動をすることで友達もできて、とても楽しそうでした。

仕事をしたり、野菜を作ったり、地域のボランティア活動に参加したりと、毎日生き生きと過ごしている祖母が、具合が悪くなつて寝込んだことがあります。僕はとても心配で気持ちが落ち込んでしまい、腹痛の症状まで出てしまいました。そのとき、健康でいることは、自分のためだけでなく、周りの人のためでもあるということに気づきました。一人一人が健康に過ごすことで、元気の連鎖ができて、その人に関わる人みんなが活力のある生活を過ごせるのではないかと思います。

日本WHO協会の健康の定義では、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも精神的にも、そして

社会的にも、すべてが満たされた状態である」とあります。そして、健康で過ごすためには、「運動」「栄養」「休養」の三大要素が大切であるとも書かれてありました。自分の生活を振り返ると、あてはまることがあります。

僕は毎日、ランニングやサッカーなどをしていますが、運動しているためにお腹がすいて、食事をたくさんとるようになりました。そして疲れてすぐ寝るようにもなり、体調が良いです。つらい練習でも頑張っているので、精神的にも強くなれたような気がします。監督やチームメイトなど、いろいろな人と出会い、コミュニケーションもとっています。

運動をすることは、「健康」に過ごすための基本になることだと言えます。少子高齢化が問題になっていますが、運動に親しみ、一人一人が健康であれば、僕の祖母のように高齢の方もまだまだ地域で活躍してくださるでしょう。僕のような若い世代も、さまざまなことに挑戦して力を発揮できるでしょう。

伊達市内にはあちこちに運動施設があります。運動できる催し物もいろいろあるようです。でも、それらについてよく知られていないように感じます。もっと利用方法や参加方法を宣伝して、気軽に行けるようなものになればよいと思います。小さな子供からお年寄りまで幅広い年齢の人が、運動に親しみ交流すれば、月館町も伊達市も活力のあるまちになるでしょう。そのためにどんな工夫をすればよいか、これからみんな考えていくことが大切だと思います。

優秀賞

輝く伊達市へ。「今」じゅるいふ

桃陵中学校 二年 武田 杏奈

震災後、伊達市で過ごして十一年。その間、私にはたくさんの友達ができる。その中で、自分が尊敬する、自慢の友達が一人いる。

中学校に上がってから、私は彼女と一緒に登校するようになった。彼女は、知り合いはもちろんだが、近所、地域の人にあいさつをする。私は、いつも一步遅れてあいさつをしていた。ある朝私が待ち合わせ場所に行くと、彼女は心配そうな顔でソワソワと立っていた。尋ねると、座りこんでいたおばあさんが道端にいたらしく、声をかけて立ち上がらせてあげたが、その場で

「ありがとう。もう大丈夫。」

と言われ、立ち去ってきたらしい。学校に着いてからいそいで職員室に行き、学年主任の先生にそのことを伝えてみると、後から確認に行ってくれた。すでにその場所におばあさんはいなかったため、おそらく大丈夫だろうとのことだったので、二人でほっと胸をなでおろしたのを覚えている。

私は、あの時の彼女をとてもちいいと思う。朝の忙しい時間帯に、おばあさんに声をかけた行為自体もだが、そこで完結せず、

大人に協力してもらい、人のために動こうとする心と判断力がだ。自分が彼女の立場でも、声をかけたり相談したりはしたと思う。だが、あそこまで早い判断と大きな行動はできなかったと思う。

地域の活性化には、一人一人に、彼女のように周りの人を思う心や、積極的に関わろうと思う気持ちが必要なのではないのだろうか。私が彼女にあこがれて、あいさつや関わりを増やそうとしたように、目標となる人が必要なのではないだろうか。

これをふまえ、私が、私達が、伊達市のためにできることはなんなのか。私は、中学生として、そして地域の一員として、誰かの目標となることだと思う。例えば、私は今、生活委員としてあいさつ運動を行っている。これも、地域にあいさつの輪を広げるために大切なことだ。それ以外にも、生徒会の方達は、ボランティア活動を行っている。このような活動に積極的に参加することも、一人一人が地域の一員である自覚をもつのに大事なことだろう。

私達が伊達市のためにできること、その一つ一つは、とても小さいことであり、めんどくさいと思う人もいるだろう。私も、最近まではそう思っていた。しかし、小さなことが積み重なれば、いつか大きな変化をもたらすはずだ。自分はもう、中学生だ。これからの世界を創っていく世代として、この地域がより輝くため、私達に何ができるのか。長い道のりの最初の一步を今、踏み出したい。

にぎわいのある健幸都市へ

伊達中学校 二年 對馬 佳凜

伊達市の市民憲章「めざしましょうすこやかで活力のあるまちを」は、私たちにとって、今、とても大切なことだと思います。

二〇二〇年一月、国内で初めてコロナウイルス感染者が確認されてから一年半が過ぎました。その間、学校が休校になったり、自由に外出ができなくなったり、不自由な生活を強いられるようになりました。そして、感染への不安や外出自粛というストレスから、感染した人やその家族、医療従事者の方たちに対し、誹謗中傷や偏見、差別といった問題も発生しています。私はこのような時だからこそ、自分たちの社会の在り方や、人としての生き方が問われていると思うのです。

コロナウイルス感染症の大流行によって、医療現場がどのように変わったのかを知るために、夏休みに緩和ケア看護師の方にお話を伺いました。特に印象に残ったのは、家族にとって大切な人である患者さんの最期の時をその家族の方が一緒に過ごせなくなり、寂しい思いをさせてしまっている心苦しきがある、という言葉でした。患者さんに、「家族に会いたい。」と言われることもあり、看護師の方は辛そうでした。私の祖母は昨年末に亡くなりました。私たちは感染を免れていたので、病院で祖母に会うことはできました。しか

し、私たちの面会時間はほんのわずかで、生前の顔はあまり見ることができず、とてもやりきれない気持ちになりました。人と人とのつながりは貴いものであることを心に刻みました。

今の医療現場はまさに戦場と言えます。こうして未知なるウイルスと戦っている方たちに協力することがとても重要であると感じました。私たちには、何ができるのでしょうか。まずは、市民一人ひとりが自覚を持って感染症対策に努めることだと思います。自身の命や大切な人を守り、医療に負荷がかかることを止めたいです。その上で、希薄になった人とのつながりを取り戻すことが必要です。コロナ発生前は、お祭りや小中学校の行事などを通して、交流の輪の中にいたのを思い出します。しかしコロナ禍によって断たれてしまった現状から、人は人と支え合い、励まし合って生きていくのだということが見えてきます。人が人を思いやり、自分を大切にするために交流の場が必要で、人との良好な関係が家族、地域、医療の場を守ることに繋がります。制約が多い現状だからこそ、学校、地域、医療現場を結ぶ催しものや手紙、アート、スポーツなどでの工夫をこらした交流ができたらと思います。また、私は地域の人たちとあいさつを交わすことを意識しています。街の雰囲気が少しでも良くなれば交流が進み、社会の在り方が見直され、すこやかで活力のある街になっていくと思います。

コロナ禍は、人が人を想い、心と身体の健幸を大切にすべきだというのを教えているのだと感じました。

優良賞

自分ができることを最大限に

霊山中学校 二年 菅野 りり愛

窓を開けると、小鳥のさえずりが聞こえ、心地良いさわやかな風が、私のほほを撫でる。私が住んでいるところ、伊達市は、周りを山々に囲まれて盆地の中にあり、春には桃の花で、まちが一面ピンク色に染まる。また、荒々しい岩山が特徴で生命力を感じさせる絶景、名峰霊山は日本百景にも選ばれ、伊達市は自然豊かな土地であふれている。このように私は、伊達市の自然と共に生活し、何て恵まれているのだろうと思ひながら、近年気がかりなことがある。それは、急激な少子高齢化であり、人口の減少や過疎化が進んでいることだ。地域における人口の減少は、地域コミュニティの衰退によって、人々のつながりを弱めてしまうのではないか。それを防ぐために、特に若い世代の私たちが地域を活性化させ、活気あふれるまちづくりに積極的に取り組んでいく必要があると思う。

そんな思いの中、この夏休みに私は、北塩原村でペンション経営をしているご夫婦と出会った。「どちらからですか」と聞かれ、「伊達市です」と答えると、ご夫婦は、伊達市の場所と、桃が有名なことは知っているが、一度も行ったことがないと話され、とても伊達市に興味を

持ってくれた。続けて私は、伊達市の人口や、春夏秋冬の気候や景色、桃をはじめとする果物や野菜など特産品のこと、太鼓まつりや、ももの里マラソン大会のこと、宮城県と伊達市と福島市を結ぶ阿武隈急行線が運行していること、最後に、東北中央自動車道が全線開通し、近隣都市へのアクセスも便利になったことなど、伊達市の魅力を知っている限り伝え終えた。その時ご夫婦は、声を揃えて、「伊達市に行きたい。行ってみたい。阿武隈急行に乗ってみたい」と言ってくれた。その瞬間私は、あまりの嬉しさに胸が震えた。こんなにも相手の心を動かすことができる伊達市の魅力に、改めて感動し、ありがたいと思えた。ご夫婦とは、コロナ禍が落ち着いたら伊達市で再会すると約束をして別れた。

このような経験をして、私が住んでいる伊達市を誇りに思い、活力のあるまちをめざし、自分が今できる最大限の力を積み重ねていこうと決意をした。大切なのは、何かの形で地域に関わることだ。私は地域の花火大会や、盆踊り、育成会各種イベント、秋のお祭り、伊達市の太鼓まつりには欠かさず参加してきた。今まで以上に、家族はもちろん、友だちや、周りの方に声掛けをして、地域を盛り上げていきたい。多くの方の関わりにより、地域に対する愛着や意識が一層高まること、地域を想うことにもつながり、これによって活力のあるまちがつくられていくのだと思う。人々のつながりを弱めてしまわないように、大自然の空気を胸いっぱい吸いこんで、わくわくドキドキ満載の伊達市を、若い力で輝かせていきたい。

活気を取り戻すには

月舘学園中学校 三年 齋藤 理那

私が住んでいる月舘町では、コロナが流行る前までいろいろな行事を行っていました。「小手姫の里祭り」や花火大会、公民館での運動会などがあり、私は今挙げた三つの行事すべてに行ったこと、参加したことがあります。そのときの月舘はとても活気がありました。でも今の月舘は少子高齢化やコロナの状況下でもあり、実施する費用もあまりなく、行事はほとんど開催されなくなってしまうしました。いろいろな事情があるので仕方ないことだとは思いますが、私は少しさみしさも感じます。友達と一緒に歩き回ったお祭り、小さい子どもたちからお年寄りの方まで参加して楽しんだミニ運動会など、地域の人と交流できる機会がたくさんあったのに、今ではほとんど何もなく残念でなりません。

私はこの状況をなんとかしたいと思いますが、そう簡単にどうにかできるようなことはありません。しかし、地道にですが、月舘町に貢献できるようなことは学校でいくつか行っています。

一つ目は、ピカピカ運動という取り組みです。この取り組みの中で私が良いなと思ったのは、老人ホームへ行ってお年寄りの方々に歌を聴かせるというものです。行事がなく、お年寄りとの交流ができない中、このような取り組みはとても良いと思いました。歌以外

にも昔ながらの遊びを一緒にしたりといろいろな交流しました。他にも、児童クラブにいる小学生と遊んだりする活動もあり、幅広く交流が行えるのは、地域のイベントが減っている中なので、とても良いことです。このピカピカ運動の活動は月舘学園が続けていくべきものだと思います。

二つ目は、中学三年生で行っているふるさと学習です。地域おこしとして自分たちが主体となって地域を活性化させるための活動を行う取り組みです。月舘オリジナルのスーツを作ったり、イベントを企画したりと自由に考えてよりよい町づくりを目指しています。この活動は活気ある月舘町にしていくためには、とても大切なことだと思いました。中学生にできることは限られています。実際にしたら町を活性化できるのか考えて企画してみること、今まで気づかなかった地域の魅力が発見できました。コロナでたくさん制限がありますが、少しでも地域に貢献できるということががんばりたいです。

このように、今、少子高齢化が進んでいたりして活気がなくなりつつある月舘町ですが、私たちが月舘をPRするために、現在ふるさと学習に力を入れていて、自分たちでいいと思ったふるさとの写真をポスターにして貼るということをしています。その活動を通して新しい発見もいっぱいありました。これから今の自分たちでできることをやっていきたいです。そして、伊達市全体にも良い影響を与えられるといいです。

暮らしと健康

松陽中学校 一年 佐藤 空道

僕は今まで生きてきた中で、大きな怪我や病気をしたことがありません。

ただし、それは僕の中では自慢ではありません。

なぜなら、僕は学校の部活では文化部に入っていて、運動部の友達と比べると運動量も少ないし、生活の中で特に健康に気を使っただけに良いことをしているということもないからです。

それに比べて、僕の父は毎朝筋力トレーニングをしてから仕事に行きます。僕に比べると、とても努力しているように見えます。僕が嫌いな野菜も体に良いからと言って朝、たくさん食べていきます。なぜ、そんなに頑張れるのかたずねてみました。父は、

「毎日鍛えて、ずっと健康でいられれば、いつまでも好きなことができるだろうと思っている。」

また、

「健康のありがたさは病気になった時にそのありがたさが初めてわかるんだ。」

と言っていました。

東日本大震災の年、父は薬を飲んでも熱が下がらなくなり原因不明で入院したそうです。原因がわからず、免疫力も弱くなっていた

ので家族との接触も禁止され、面会謝絶だったそうです。

父は辛いのに家族とも会えなくて、普通の生活がいかに幸せかがその時初めてわかったと言っていました。だから健康でいられるように毎日努力ができるのかなと思いました。

また、母は姉や弟を出産する時、出産予定より二ヶ月も前から入院してたそうです。その時はただただ、母子共に無事でありまううにと思っていたそうです。いかに、普通に健やかにすごすということがとても大事なんだなと思いました。

僕には大好きな祖母がいます。テルちゃんと呼んでいます。祖母と一緒にいることが普通の暮らしです。だから祖母にはずっと長生きしてほしいと思っています。そこで、僕は祖母と一緒に健康で暮らせるようにするには何か運動を頑張ろうと思い、保原町にあるプールに祖母と通うことにしました。すぐ近くに一年中入れる温水プールがあるのはとても便利だし、これを利用しない手はないと思いました。はじめのうちは僕と祖母だけで通っていましたが、何回か通って行くうちにいつの間にか家族みんなで通うようになっていました。やっぱりみんな運動はいいことだと思っているのだと感じました。

あらためて健康について家族の話を聞いて、少しでも健康に気を使うことで日常の幸せが感じられれば良いと思うようになりました。

これからは日々の健康に感謝して、病気になるべくならないよう、少しずつ体に良いことを率先して行っていきたいと思っています。健康で健幸に伊達市のみんながなればいいなと思います。

未来へのバトン

月館学園中学校 一年 関根 颯星

僕が住む月館町の人々は、親切で明るい人ばかりです。また、子供からお年寄りまで、皆の仲が良く、活気にあふれています。しかし、近年若い世代の人々が減り、お年寄りが増えてきています。僕は、このままだと月館町の活気が薄れてしまうのではないかと不安を感じています。そこで、今、中学生の僕が取り組んでいることと、大人になったときに取り組みたいことを見直してみました。

僕は今、中学校で行われている「ピカピカ運動」というボランティア活動に参加しています。ピカピカ運動では、地域の公共施設の清掃や老人ホームへの訪問など様々な活動を行っています。僕はその中で、学童保育へ行き、小学生と触れ合うという活動をしました。そして、たくさんの自然に囲まれて遊ぶ小学生たちが、大変のびのびとして楽しそうなことに感動しました。またそれと同時に、これから先何年たっても、月館町で暮らす子供たちが多くいてほしいと強く思いました。

僕は、月館町をより活性化させ盛り上げるためには、今町に住んでいる人たちだけでなく、違った地域の方々にも目を向けてもらう必要があると思います。そのためには、町内のイベントを増やすことが効果的だと考えます。

月館町では、年に二回ほど「月館マルシェ」が行われます。月館マルシェとは、月館町の特産物の販売などを行うイベントのことで、たくさんの方が集まります。僕は、このイベントが大好きで、毎回とても楽しみにしています。しかし、中学生の僕には、その際に友達と楽しむことはできません、自らが主催して運営することはできません。だから、僕が大人になったときには、イベントの中心となって活動したいと思うのです。

具体的にはまず、月館マルシェの回数を今よりも増やしたいと考えています。月館町には、春夏秋冬それぞれで、魅力ある食べ物や景色があります。それらを生かし、季節によって違った楽しみ方のできる月館マルシェを展開したいです。そうすることで、イベントを今以上に盛り上げて、伊達市内はもちろん、他の市町村の人々にも認めてもらえるくらいの活気にあふれる豊かな町をつくり上げたいです。

僕は、たくさんの自然と人々のやさしさに包まれた月館町が好きです。そして、この町に生まれたことを誇りに思っています。だからこそ、少子高齢化が進み、活気が失われてしまうことは大変悲しいのです。それらを食い止めるために、今できることには全力で取り組み、未来にバトンをつなげたいと思っています。そして将来、大人になったとき、過去からのバトンを受け取って、月館町の活性化のために精一杯努力したいと思います。

佳作

私の梁川活力化計画

梁川中学校 二年 吉田 奈々美

私が、私の住んでいる伊達市梁川町を活力のある町とするために取り組んでいることと、これから取り組みたいと思っていることを、いくつか挙げたいと思います。

一つ目は、今取り組んでいることの一つで『あいさつ』です。

登校中に毎朝立ってくださる見守り隊の方や、学校ですれ違った先生方に自分からすすんであいさつをするように心がけています。

小学校の頃、

「あいさつを返すことは、あいさつではなく返事だよ。」

と言われて以来、私からあいさつをするよう気をつけています。町の人が明るくあいさつをするようになれば、町の活力化につながると、その先生の言葉で感じたからです。

二つ目は、今取り組んでいることの二つ目で『防災』です。

二〇一九年十月、台風十九号が梁川に上陸しました。梁川は川が多いため、残された爪跡もとても大きいものでした。幸い死者は出なかったものの、家や建物の浸水被害が酷く、復興に長い時間がかかりました。

この災害の後、梁川町の復興作業へ多くの人に携わって頂きました。

た。食べ物を供給してくださった町の方や、ボランティアに訪れてくださった方、温かく心の込もったメッセージを送ってくださった方など、沢山の方々が私達を災害のショックから救ってくださいました。

この一件を受けて、私は『防災バッグ』をつくりました。中身は少しの食料と懐中電灯、タオルなどです。供給が出来るような料理の練習も、これからしたいと思っています。

前回の災害の後、私は復興が終わるのを待つだけで、何もすることができませんでした。せめてもの思いで始めた小さな行動が、町のために活きることがあるのなら嬉しいです。

三つ目は、これから取り組もうと思っていることの一つで『ごみ拾い』です。

取り組みたいと思ったきっかけは、町内のある場所に散乱していたごみを、女性が拾っているところを見たことです。

私はその時衝撃を受けました。正直、各地でごみ問題がおきている中で、「梁川は綺麗な町だし、ごみ問題とも無縁なのだろう」と思っていたのですが、先日のお出来事を受けて、「梁川を綺麗にしてくれる人がいるから、この町は綺麗なんだな」と分かりました。私もあの女性のように、ごみがあれば率先して拾うことができる、町の美化に貢献できるような人になりたいです。

これまで三つのことを挙げましたが、やはり町の活力化に一番大切なのは、『伊達市民一人一人が、自分の住む町のことを大切に考え、そこにできることを少しでも実践すること』だと私は思っています。

私の住んでいるまち

桃陵中学校 一年 菅野 優花

私たちの住んでいる伊達市を「すこやかで活力のあるまち」にするためにはどうすればいいでしょうか。伊達市には地域を盛り上げる行事がたくさんあります。その行事に市民が協力し合うことで「活力のあるまち」が実現できると思います。

昨年から新型コロナウイルス感染症の影響で、市民が参加できる行事が中止になってしまっていますが、それ以前は私もいくつかの行事に参加していました。

まず、「ももの里マラソン」。毎年たくさんの人が参加するイベントです。小学生からお年寄りまで参加しています。参加者には、加賞として伊達市の特産物である桃一・五キログラムが贈られます。伊達市以外の人に伊達市をPRするのにとっても役に立つと思います。名前が知られ、多くの人が訪れるようになると伊達市はさらに活力を増してくると思います。

毎年七月の第一日曜日には「河川クリーンアップ作戦」が実施されます。市内の河川周辺の一斉清掃を行い、きれいな町をつくっていかうとする仕事です。毎年多くの人が参加していますが、もっと参加者が多くなると、みんなが協力する住みやすい伊達市をつくっていけると思います。

また、「ほばらサマーフェスティバル」や「霊山太鼓まつり」「長岡天王祭」「つつこ引き」など、お祭りも盛んに行われています。お祭りでは太鼓の演奏や出店が出て、多くの人が集まりにぎわいます。地域の行事ですが、他の市などからも多くの人がやってくるので「活力のある」まちづくりのために、もっともっとPRできるといいと思います。

このようなイベントやお祭りは参加者が少ないと盛り上がりません。私は、以前どこかの小さなお祭りに行ったことがあります。そのお祭りは見に来る人も少なく、屋台も全然出てなくてつまらなかったことをおぼえています。つまらないことに参加しようと思う人は少ないと思います。今あるイベントやお祭りが少しでもおもしろいものになるように、私たち市民もアイデアを出したり、協力したりできると思います。そして、自分たちで作り上げたイベントであれば、さらに盛り上げることができると思います。そのために、私たちはもっともっと積極的に地域の行事に参加すべきだと思います。そうすることで、まちの活力につながっていくと思います。

私はこれからも、地域の行事に積極的に参加し、楽しんで、この伊達市をさらに盛り上げるように協力していきたいと思っています。

あいさつの重要性

伊達中学校 三年 三浦 莉愛

私の住んでいる地域には、温かくて明るい人がたくさんいます。小さい頃から両親に「あいさつはちゃんとしなさい」ということを何度も言われてきました。でもやっぱり、知らない人になると、あいさつのしやすさが変わってくるのです。地域の人は、その人の人柄と愛想で言葉のやり取りをしやすい雰囲気をつくってくれます。

私が登校するルートに、必ず毎朝あいさつを交わしてくれるおじいさんがいます。朝だけではなく、部活の帰りに「お疲れ様です。」と言ってくれたり、長い休み明けには「もう学校か、頑張ってください。」などと名前も知らない私に丁寧な言葉をかけてくださいます。登下校で一人の道のりが長い私からしたら、数秒の会話でもなんとなく安心できます。高校生になったらその道を通ることはほとんどなくなってしまうので、今のうちに少しでもコミュニケーションをとって、いつかは感謝の気持ちを伝えたいです。それから、ご近所のおばあさんに数年ぶりにお会いした際に、あいさつをしようと思ってとっさに出た言葉が、「こんにちは、お久しぶりです。」でした。言った後によく考えたら、さすがに覚えてないかもと、ドキドキしていました。ですが、「私のこと覚えているの？大きくなっ

たね。」という言葉が返ってきたのです。おばあさんが私と同じことを考えていたことに少し驚きました。その後も明るく接してくださって、長年生きてきた方は対応力がすごいなあと感じさせてくれました。そんな中、私はインターネットでびっくりする記事を見ました。それは、都会では近所の方やすれ違った人にはあいさつをしないのが普通という内容でした。最初はそんなことあるわけないと思っていました。調べてみたら犯罪や事件に巻き込まれないようになどの理由がありました。確かに、だれかれ構わずにあいさつをするのはどうかと思いますが、ご近所さんや地域の方々とコミュニケーションをとることは、人間にとって大事だと思います。このほかにも、あいさつが禁止のマンションがあったり、私とは全く違う価値観で生きてきた人もいるだろうし、地域によってそれぞれの問題があるのかなと考えました。

あいさつが全てなわけではないけど、声をかけてくれるおじいさんや久しぶりに会っても温かく話してくれるおばあさんなど、こんなにもいい人がこの世界にいるということをもっと多くの人に知ってもらいたい。言葉には、何かしらの力があるから、人と人との繋がりと同じくらいに会話も大切にしたいと思います。さまざまな意見を持つている人がいる中で、自分と相手の思いが合わなくてもお互いが気持ちの良い環境をつくるのが重要だと考えました。何より今、私と関わってくださる地域の方々これからも心から感謝していきたいです。

あいさつの役割について考えたこと

梁川中学校 一年 石川 佳依

僕が、すこやかで活力のある伊達市について考えた時に、一番最初に、頭に浮かぶのが、あいさつについてです。

僕の学校では、よりよい学校にするため、子供たちが健全に学校を過ごせるように、あいさつ運動をしています。毎日朝七時四十分からの十分間、校門と昇降口の二かしよで、学級や学校のリーダーたちが、立ってあいさつを呼びかけています。

僕が、あいさつ運動をする前に、考えていたことは、僕が、あいさつをすれば、誰もがあいさつをすと思うていました。しかし、実際は、僕の友達ですらあいさつを返してくれない時もあるからです。

僕が考える理由は、あいさつをするのがはずかしいことと、あいさつをしているけれど声が小さくて、僕の方まで聞こえないということがあるからです。これらのことを改善するために、僕が考えたことは、一人一人の目を見てあいさつをすることと、ともに一言声をかけることによって、相手があいさつを返しやすくなり、あいさつ運動から一つの、会話へと変わっていき、それが梁川中学校から徐々に伊達市全体へと広がっていくように、学年委員長としてみんなに働きかけていきたいです。

今のは、学校でのあいさつについて考えましたが、町での知らない人へのあいさつについて考えてみたいと思います。町でのあいさつの役割は、気持ちの良いあいさつのやりとりということではなく、防犯対策にとっても有効であるということを知ることがあります。犯罪者（住居侵入や小さい子への声かけ）への抑止力になるそうです。犯罪者は町の人に声をかけられたことで、顔を覚えられたと思うたり、犯罪への気持ちを思いとどめたりする力があります。なので、僕は、登下校の時にすれ違う人にもあいさつをするようにしています。急に僕が、あいさつをすることで、驚いたり知らないふりをする人もいますが、このあいさつは僕のためだけではなく、町の安全につながると信じて、これからも続けていきたいと思っています。

僕が、思う伊達市のあいさつの言葉には、「おはようない」や「気をつけてない」などの方言があります。僕は、これらの方言には優しさがあ、僕が、朝登校する時などに地域のおばあちゃんなどがあいさつをしてくれた時に、僕は毎日、伊達市のあいさつは、温かみがあり、とても気持ちの良いあいさつだなあと思っています。なので、これからも伝えていくために、僕は、伊達市の方言のあいさつを、みんなに呼びかけてまずは、梁川中学校から、伊達市全体へと気持ちの良いあいさつができるように、これからも、伊達市の方言を大切にしていきたいです。

講 評

審査委員長 高野 保夫（福島大学名誉教授）

伊達市の市民憲章作文コンクールの五年目は、「めざしましょうすこやかで活力のあるまちを」という課題でした。これには「健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特徴を生かした産業の振興・発展をめざします。」という補足説明が添えられていますが、それらを受けて、課題の内容を小・中学生がどう具体化し、文章としていかにまとめているかが作文審査のポイントでした。例年同様、今年も市内の各小・中学校の協力のもと五百八点の作文が寄せられ、その中から学校推薦のあった三十八点の作品が最終審査に残りました。三人の委員により選考が行われた結果、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が、次のように決まりました。

＊

最優秀賞に輝いたのは、伊達小学校五年の大山 慶さんの「ぼくとマラソン」と月舘学園中学校二年の佐藤亜矢斗さんの「健康で過ごす」の二つの作品でした。大山さんの作文は題名からも分かるように、伊達市が主催するもの里マラソンに親子で参加し、その時に感じたことを生き生きと描いている点が高く評価されました。ボランティアの協力体制や沿道で応援している人々の様子を振り返り

ながら、全国からの参加者に贈られる様々なプレゼントやイベントなどを通して、健幸都市伊達市の魅力を積極的に発信してはどうか、また、自分もその一人になりたいという前向きな考えでまとめています。中学生の佐藤さんの文章は、祖母の日常の暮らし方や健康のことから書き出し、WHOの健康の定義にも触れながら、健康づくりやスポーツ活動の重要性を徐々に強調していく文章の展開が見事です。広報活動に力を入れながら、子どもから大人まで運動に親しむことで地域の活力が生まれる環境について工夫してはどうかと最後を結んでいます。

優秀賞に選ばれたのは四人の作品です。小学生部門は、掛田小学校六年の佐藤優美さんの「緑豊かな町から活力を」と保原小学校六年の田代結衣さんの「伊達市民の健幸」の二作品。中学生部門は、桃陵中学校二年の武田杏奈さんの「輝く伊達市へ。『今』できること」と伊達中学校二年の對馬佳凜さんの「にぎわいのある健幸都市へ」の二つの作品です。佐藤さんの作文は、ふるさととの景勝地である霊山に着目し、運動不足になりがちな日常生活を振り返り、登山などを通して運動に親しみ、それを市民の活力につなげたいと言っています。田代さんは、健幸都市をかかげる伊達市の取り組みを調べ、まず自分や家族から行動を起こし、多くの市民が健康づくりを心がけるようにしたいと述べています。中学生の武田さんの文章は、親しい友人の判断力や行動力に刺激を受け、一人一人が伊達市の将来を見据え、中学生として地道な実践活動を積み上げることの大切

さについて考えたものです。對馬さんは、コロナ禍の中で頑張っている医療従事者に着目し、にぎわいのある健康都市をかかげる伊達市の将来について、実際に医療の現場を訪問し実感したことを踏まえて考えを深めているところに値打ちがあります。

優良賞を受賞したのは八人の作品です。小学生部門は、伊達小学校六年の秋葉優真さんの「夢の公園に向かつて」、伊達東小学校五年の小野瑛士朗さんの「イベントで活力のある町へ」、石田小学校五年の八島心優さんの「感謝の気持ちを忘れずに」、月舘学園小学校六年の伊東琢磨さんの「すこやかで活力のある伊達市へ」の四作品です。秋葉さんは、市民が楽しめる公園づくりを中心に、健康づくりや身近な環境問題を考えた夢が感じられる作文です。小野さんは、子どもから大人まで参加できるイベントづくりを通して、活力ある地域を創るための三つのイベントを提案しています。八島さんは、地元のクラブ活動での体験を踏まえ、世代の異なる人々との交流を通じて感謝する気持ちを大事にしたいと述べています。伊東さんは、六年生らしい視点から伊達市の将来に向けての課題を具体的に考えようとした意欲的な作文でした。

中学生部門は、靈山中学校二年の菅野りり愛さんの「自分ができることを最大限に」、月舘学園中学校三年の齋藤理那さんの「活気を取り戻すには」、松陽中学校一年の佐藤空道さんの「暮らしと健康」、月舘学園中学校一年の関根颯星さんの「未来へのバトン」の四つの作品です。菅野さんは、夏休みの体験をもとに自分たちの若

い力で伊達市を活性化させたいという思いをつづっています。齋藤さんは、少子高齢化が進む地域の課題について、学校で取り組んでいる貢献活動を通じて自分たちにできることを具体的に提言しています。佐藤さんは、ふだん意識していない健康について、家族の取り組みをもとに振り返り、自らの実践につなげながら健康づくりの大切さを考えようとしています。関根さんは、月舘マルシェの開催方法などの具体的な取り組みを通じて、少子高齢化が進行する地域社会の今後の活性化について提案しています。

佳作には八つの作品が選ばれました。小学生部門は、栗野小学校六年の渡邊結菜さんの「伊達市のために私ができることは」、堰本小学校五年の幕田幸穂さんの「笑顔と元気あふれるまちをめざして」、上保原小学校五年の佐藤陽向さんの「富成をすこやかで活力のある町へ」、掛田小学校五年の齋藤心春さんの「人も動物もすこやかで活力のあるまちを」という四作品です。中学生部門は、梁川中学校二年の吉田奈々美さんの「私の梁川活力化計画」、桃陵中学校一年の菅野優花さんの「私の住んでいるまち」、伊達中学校三年の三浦莉愛さんの「あいさつの重要性」、梁川中学校一年の石川佳依さんの「あいさつの役割について考えたこと」の四つの作品でした。小・中学生によって視点の違いは見られましたが、いずれの作文も伊達市の将来を考えながら、人々が生き生きと活動できる地域づくりを進めるために、人間関係のあり方、あるいは健康づくりの重要性などについて具体的に書いていたところに好感が持てました。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立つて行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和4年1月